天地　ネットワークテーブル　551号

天地シニアネットワーク　2024．1．16

TENTI TODAY			1
会員の広場　年賀状に見る2024年へのコメント			2
随　筆	「日々をいとおしみて」より「老いの生きがい」「携帯電話」	宮川典子	4
歴　史	仏独の和解と欧州連合（EU）の発展・繁栄について（3）	佐川雄一	
歴　史	「了解日本（日本を知る）」（18） 日本人の宗教観、神道（宗教）、天皇制（1）	兪彭年	8
アンテナ・コーナー：最近の新聞・ネット・本などからの「気になる話」　三題			11
事務局			14

****

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ

****

元日夕の能登半島地震，正月気分を一変させました。テレビで見る高齢者の方々の茫然とした姿は大変ショックでした。８０歳を超える高齢者になって気付くのは、思い出は幼少期の頃のことが圧倒的に多い、ということです。被災地の高齢者の方々も同様でしょう。地元を離れたくないと寂しげに語る胸の内、よく解ります。

****

地震発生から2週間経ちますが、災害関連死が増え始め心配です。地震大国で、少子高齢化が急速に進む日本、災害時にはどう対応するべきか、準備はしていたのでしょうが・・・

****

地震による自粛ムード、日本経済への影響がありそうです。しかし、東証株価はこのところ連日大幅高。海外投資家の日本株見直しに加えて、新ＮＩＳＡのスタートがプラスになっているようです。一方、為替市場では、再び円安が進み始めています。一方に偏らない社会、良しとすべきか意見が分かれそうです。

****

戦後の大地震、記憶に残るものが4回。最初は、１９４８年６月２８日夕刻に発生した福井地震、翌年、福井市郊外にある親戚を訪ねた時、多くの家屋の倒壊を目にしました。Ｍ7.1の都市直下型地震で、３５，０００戸の住宅が倒壊・焼失、したとのこと。二度目は、東京オリンピックがあった１９６４年、６月１６日午後にあった、Ｍ７．５の新潟地震。日比谷の第一生命ビルもかなり揺れた。数か月後、融資先で万代橋近くにあった新潟交通訪ねると、本社ビルの半分くらいが地中に埋没していた。

　阪神淡路大震災（１９９５年１月）のときは、神戸の会社に出向中で、もろに地震の体験をする。さらに２０１１年３月の東日本大震災の時は、秋葉原にあった天地シ

ニアの事務所（７階）にいて、ビル崩壊の恐怖で震えていました。
地震大国日本にいれば、このくらいは当然なのかもしれません。

****
正月２日、３日と箱根駅伝をテレビ観戦したが、これまでも直接コースでみることがあり、３日の復路、選手たちが小田原の中継点を過ぎた所で気分転換、急遽出かけることにしました。最終１０区のランナーが日比谷公園前を走るのは、午後１時過ぎ、十分間に合います。日比谷公園入口に着くと、東海大学の応援団でいっぱい、日生劇場の前に移動して観戦。例年に比べて人出が少なく、選手への声援も抑制気味、地震の影響を感じる。選手たちは目の前を＜あっ＞という間に通り過ぎ、いつものラーメン屋に寄って帰宅、お正月が＜あっ＞という間に通り過ぎました。
レースは、青山学院大の見事な優勝でしたが、駒沢大学は、前評判が高すぎて、監督も選手もやりにくかったに相違ありません。
****
佐川雄一さん、臺一郎さんから、体調悪しとの連絡がありました。寒さは一段と厳しくなり、コロナ、インフルエンザ、流行の兆しも見えると専門家は警告しています。健康に留意して、良き春をお迎えください。
****

会員の広場

****
年賀状に見る、２０２４年へのコメント（紹介順序はアイウエオ順）
　年賀状は、昨年中に投函されていますので、付されたコメントは、地震前のものと言えます。シニアの方々が、地震前の２０２４年をどのように捉えていたかを共有すべく、年賀状のコメントを載せてみました。年齢については、判明している方以外は、推定となりました。ご無礼ありましたらご容赦願います。
****
梶原徳二さん（９１歳）
長い間、日系３世の友人が毎年カレンダーに十二支入りの絵を画いて送ってくれています。今年はさすがに龍（たつ）年で英語でドラゴン、まさに龍は火焔の中に描かれ、自ら火焔も噴き出してこの年の争い事をおさめようとしています。私達もこのドラゴン（龍）に祈って、不当な戦に早い終結と平和の存続を期待します。
一昨年から昨年にかけて母校都立隅田川高校１００周年記念祭に同窓生として、祝賀と学業向上の為にお力添えをしました。
続いて、来年２０２５年は、母校の一橋大学は創立１５０周年に当たります。学長さん達からのお声がかりもあり、学園の発展のためにせめてもの長生きでご支援したいと考えています。
****
川谷眞佐枝さん（７？歳）
自由人となって６年目の主人は、昨年もコントラクトブリッジを楽しんでいました。料理には全く手を出さないものの、いろいろ家事も手伝ってくれるようになり助かっています。JICA 勤務の息子夫婦は、ヨルダン、パキスタンとそれぞれの勤務地で仕事に励んでいます。今年中学３年になる孫は、７月までパキスタン、９月からはヨルダンのインターナショナルスクールで学んでいます。グローバルな視点をもつ孫から、私たちも学ぶことが多くなりました。

そして私は、昨年もお茶街道まっしぐらの一年でした。健康で大好きなお茶のことを話せる場を沢山与えて頂いた幸せに感謝の日々でした。４月に主人の理解（あきらめ？）のおかげで４年ぶりにインドのダージリンを１カ月かけてじっくり旅行できたことも貴重な幸せな思い出となりました。
今年も健康に留意しつつ、海外茶産地の旅にもっと多く出かけ、お茶の世界の楽しさを少しでも多くの方にお伝えできたらと思っています。
****
久保礼次郎さん（８６歳）
現在　我々は悪い時期を通過している　事態は良くなるまでに　おそらく現在より悪くなるだろう　しかし我々が忍耐し　我慢しさえすれば　やがて良くなることを私は全く疑わない　（ウィンストン・チャーチル）
ウクライナでの戦いが続いている最中に　またもパレスチナでも戦がはじまりこれが世界中に拡大して行くことが危惧される世の中になっています。事態は深刻です。
しかし
愉快なことを理解できない人間に世の中の深刻なことがらが解るはずがない
連合国を勝利に導いた英国の宰相のユニークな物の見方に感動しました。
****
中山　豊さん（７？歳）
地球が悲鳴を上げています。やっとコロナが終息を迎えようとしているのに世界各地で発生する地震、噴火、台風、洪水、干ばつ火災等の異常気象現象・地球が破滅の方向に向かっている気がします。
こんな時に人間は何をしているのか！「ウクライナ、イスラエルと終わりの見えない紛争」「各国で台頭する不気味なナショナリズム」「我が国の期待できない政治家達」「トランプを待望するおかしな米国」、このままでは本当に地球は破滅してしまいます。
明るい話題はスポーツしか無いのか？今こそ大谷翔平君のような実力も人間性も兼ね備えた世界をリードする若きリーダーが出てきて欲しいと願うばかりである。
今年は、地球にとって良い年になりますように。
****
増野直美さん（８？歳）
生存競争に負けたり、自然淘汰されたり、病原菌に侵されたりしてすっかり様変わりした我が家の庭。亜熱帯の植物が増え、地球温暖化が進んでいると感じた昨夏は、朝夕の水撒きに疲労困憊しました。しかし、癒される日々でもありました。
＜コンロンカ＞いつの間にか庭の中心になって長く花を咲かせている。
＜アマリリス＞うちにきて１０年、鉢から土に埋められて、名前さえ憶えてもらえずにいたのにバラに撒かれた肥料をもらって突然咲いた。
＜ランタナ＞一昨年夏、ハゲイトウ鉢に紛れ込んだ種が芽を出し、２ｍの木になって庭の一番いい場所に陣取って咲いた。
****
村山雅彦さん（８？歳）
台湾海峡周辺を巡るきな臭さに気を揉んでいます。日本統治時代には「蓬莱島」と称されそのコメは蓬莱米と呼ばれていたようですが、敗戦までその蓬莱米で育った小生としてもいささか気になるところです。「蓬莱」の意味は異なりますが、せめて東亜には春が参りますように。
「蓬莱の山まつりせん老の春」（蕪村）
（米国西海岸産の米「国宝ローズ」も上記蓬莱米の改良種とのことです）

****

連　載

****

エッセイ集　　宮川典子（９４歳）　「日々をいとおしみて」

「老いの生きがい」

以前から血圧が少々高く、 月に一度内科医院に行くが、薬のお陰でほぼ正常値を保っている。医者が先日、胸と背に聴診器を当てながら「あなたはどこも悪いところが無いから、百歳まで生きられますよ」と言う。一瞬ほっとしたが、あと七年どうやって生きて行こうかと新たな悩みが生じた。

　私のきょうだいは女四人と男二人、弟たちはもういないが、９４歳の姉を筆頭に女たちはぴんぴんしている。終戦前後の極端な食糧危機も、育ち盛りだった私たちに何の影響も及ぼさなかったようだ。医師によれば親から丈夫な遺伝子をもらっているそうだ。

しかし立春も過ぎたのに最近の異常な寒さ、体を動かすのが時々億くうになる。昨年せっかく入った体操の会が、コロナ禍で中止になったのも残念だ。近くに住む長女・長男夫婦に助けられながら一人暮らしを続けているが、この横着な状態は何とかしなければならない。

　今までの生活を振り返ると、一番大きな出来事は、夫の母と同居を始めたことだった。６６歳の義母、会社員の夫、４２歳の私、高校生の長女、中学生の長男と5人の生活だ。義母は戦争未亡人で、４人の息子を大学に行かせるために働き続けた気丈な人だった。そんな義母と３２年間一緒に暮らすうちに、私も鍛えられた。
昼食は義母と二人きりである。ある日、がんもどきと野菜の煮物を出したら「蛋白質が足りない」。意地っ張りの私、二度と言われないようにがんばった。食事時間も朝だけは夫や子供の通勤通学が早いので別だが、昼食１２時、夕食７時は厳守した。
年の割に元気だった義母は、９６歳の時みずから希望してホームに入所した。サービスがよく、時々車で外泊させてくれる。翌年の４月に帰って来た時、義母はすき焼きが食べたいと言った。最高級の松坂牛を奮発したら、とても喜んでくれた。その上天候までが幸いした。いつも5月の連休に盛りとなる庭の藤の花が、温暖だったお陰で満開になって彼女を歓迎してくれたのだ。
義母は十分満足してホームへ戻って行った。その半月後、付属の病院静かに息を引き取った。義母との生活があったからこそ、今の私がある。長い間に習慣化された栄養摂取と規則正しい生活。私も義母のような最期を迎えられるだろうか。
さて、今後７年間の生きる目標は。

　折よく名古屋に住む孫娘から電話があった。ひ孫が２月９日４歳になるが、コロナ禍で会う機会も少ない。「あと二年経つと小学生ですよ。おばあちゃん、ランドセル姿、楽しみにしていてね」と孫娘の声が高らかに響いた。

「携帯電話」

歩いて１０分ほどの娘の家に届け物をし、３時のお茶を飲みながら、散々おしゃべりをして楽しい気分で家に帰って来た。夜 11 時を過ぎて、いつものように就寝の用意をする。夜中に飲むための水を用意し、エアコンのスイッチを入れ、ケータイを充電器に乗せることだ。しかしそのケータイがない。昼間持ち歩いた手提げの中にもなかった。固定電話の子機に、長ったらしい自分のケータイ番号を打ち込み、家中をゆっくりと歩き回ったが１０回の呼び出し音の後は「お呼び出ししましたが、お出になりません」の決まり文句。それを何回も繰り返すが反応がなく、次第に焦って来た。家にないなら娘の家に置き忘れたのだと、自分に言い聞かせてふとんに入る。睡眠剤が利いて、ぐっすり眠った。
翌朝起きると、すぐまた「迷子探し」を始めるが、駄目だった。最後の望みを掛けて娘の家に電話したが、そこにもなかった。しばらくすると、「そちらに行くから一緒に探そう」と彼女から電話があった。
折悪しく雨が激しく降っている最中であった。前日までは、からからの晴天続きであったのに・・・。娘は来る早々、玄関内を探し、次に私が日中長くいるダイニングルームに入って、自分のケータイを押した。そしてさっさと食器戸棚の前に行き、引き出しから取り出したのが、私のケータイであった。
春のうららの隅田川
上り下りの舟人が
の着信音が鳴り響く。前夜から必死に求めていた大好きな滝廉太郎のメロディーである。喜びと共に「なぜ」の言葉が出た。私は外出の時、予備のマスクと常備薬を小さな袋に入れ、すぐ取り出せるようにして、手提げに入れて持ち歩く。前日娘の家から帰る時、別々だったケータイがいつの間にかその小袋の中に滑り込んでしまったのだろう。それに気付かず引き出しにしまったため、小袋と引き出しで二重にガードされ「春のうららの」曲が、私の耳に届かなかったのだろう。
一つ、思い当たることがある。前夜は気もそぞろで気付かなかったが、朝になって固定電話からかけると、ダイニングルームでだけ、音とも言えない、眼動とも言えない何かを体に感じたのだ。ここにはIHレンジや幾つかの電化製品が置いてあるから、そのせいだとばかり思い込んでいた。実際、調理中疲れてIHレンジに寄りかかる時、そのような感触を度々味わっている。その朝も感じた何気ない空気の動きは、私のケータイが源だったとは・・・。娘は６６歳である。若いだけあって、空気の振動をすぐに音と捕えた。
今まで会話には不自由したことはないと胸を張っていたが、人は徐々に五感の衰えが進むものと実感させられた。朝の忙しい時にわざわざ来てくれ、僅か１０分ほどでケータイを見付け、ざあざあ降りの中帰る娘を、心をこめて見送った。
この日の出来事は、我が家の珍事（椿事）として心の中にしっかり留めておこう。
****

仏独の和解と欧州連合（EU）の発展・繁栄について（３）　佐川　雄一（８６歳）

４．西ドイツの主権回復、独仏の和解そして西ドイツは奇跡の経済復興を実現する

コンラート・アデナウアーは、1949 年西独最初の首相に 73 歳で就任すると、自らがフランスをはじめとする旧連合国との和解に強力な指導力を発揮し、1955 年 5 月 5 日に連合国（アメリカ・イギリス・フランス）との間でパリ条約を締結して西独の主権を回復した。併せ、米英仏三ヵ国は、西ドイツの北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）へ

の加盟を条件に、西独の再軍備を許可する。西ドイツの再軍備とNATO加盟は、西ドイツ議会の多数に承認されるが、結果的には東西冷戦を先鋭化させることになる。

同時並行的に米国からの多額の資金援助（マーシャル・プラン）を得て西ドイツの経済復興を進め、さらにフランスとの共同ワークで「欧州石炭鉄鋼共同体」を創設する。その後、「欧州経済共同体」、「欧州原子力共同体」を結成、ドイツ、奇跡の経済復興を実現した。

アデナウアーが戦後の初代首相に就任（1949 年）以来 74 年経つが、2021 年 12 月就任のオラフ・ショルツ首相を含め、これまで 8 人の首相で統治が行われてきた。政権が変わってもナチスドイツを罪悪視する姿勢は変わらず、欧州の平和・安定・繁栄を優先する政策に固執した。

これに対し、フランスはドイツとくらべると戦後の一時期、政治が不安定であったが、ド・ゴール大統領（在位 1959～69）の登場以降、フランソア・ミッテランド（同 1981～95）,ジャック・シラク（同 1995～2007）、等が、二国間の宥和と欧州の連合を政党・時代を超えた普遍のテーマと位置づけ、仏独関係を揺るぎない強固な同盟に築き上げた。

仏独宥和の象徴：「エリゼ条約」締結の意義と内容について

仏独協力関係に戻ると、ド・ゴールが大統領（1890-1970 年、大統領在位：1959-69 年）に就任すると直ちにアデナウアー首相との間で第 1 回首脳会談（1959 年 9 月）をド・ゴールの私邸で開催、仏独和解の具体的ステップについて協議を始めた。

首脳同士の緊密な協力が功を奏し、4 年後の 1963 年１月、西ドイツとフランスは仏独協力条約（エリゼ条約）をパリの大統領官邸エリゼ宮でアデナウアー首相とド・ゴール大統領が締結する。86 歳になっていたアデナウアーはフランスと間で独仏協力条約が締結されたのを花道にして政界を引退した。

エリゼ条約（仏独協力条約）は、外交・防衛・教育と青少年問題に焦点を置き、二国間関係の包括的改善に向けて両国が不退転の姿勢で取り組むことをコミットした条約である。“条約”の日本語訳を読むと、仏独首脳の不退転の決意が伝わってくる。“条約の概要”を下記する。

1) 条約の対象分野は、外交・経済・防衛・教育と青少年問題。省庁間委員会による交流全体の調整及びフォロー。欧州共通市場の枠組みや重要な経済政策等に関する協力。教育と青少年に絞ると両国でフランス語とドイツ語の学習機会を増やし、お互いの国の言語の普及に関する協力の重要性を認識しその実現に向けて努力する、大学の学位と教育単位を共通化する。青少年の歴史認識を共有するため、教科書情報の齟齬をミニマイズする。
2) この目標に向かって両国首脳は最低年に 2 回会談する、必要とあればさらに回数を増やすことができる。本条約の主管省は外務省、外務大臣は三ヵ月毎、年 4 回会合を開催、防衛大臣も年 4 回開催、総参謀長は最低二ヵ月ごとに会合する。教育・青少年担当大臣も同じく最低 2 ヵ月毎の会合を開く。防衛分野は、戦略・戦術に関する調整、作戦研究のための研究機関を設立、軍隊間の人事交流を促進する。
3) この目的を達成するために、両国混合委員会は二国間におけるこれらの事業に関する進捗を調査し、比較検討を行う。各大臣は四半期毎の会合でこれらを審査し、遂行のための必要な指示を行う。

4）“条約”の署名者： 西ドイツ アデナウナー首相、シュローダー外務大臣 フランス ド・ゴール大統領、ポンピドゥ首相、ムルヴィル外務大臣

1963 年、エリゼ宮殿でフランス ド・ゴール大統領と西独アデナウアー首相が署名したエリゼ条約；和解のモデル 相互に憎しみ合う仇敵が眞の友人に生まれ変わった

ド・ゴールが目指したのは、戦争のない、相互に経済・防衛・青少年教育で真摯に向き合い、建設的な外交関係を築き、欧州に安定をもたらすことであった。“条約”に盛られた条項は、歴代の首脳・閣僚に受け継がれ、今日の仏独関係が築かれていった。その過程で、西ドイツの学校では、ナチスドイツが犯した犯罪を周知徹底した。

戦時中のドイツ軍人が占領下の市民や戦場で捕虜にした敵国軍人をいかに非人道的な措置で苦しめたか、事実を淡々と生徒に伝える西ドイツ政府の教育方針に、生徒の中には、これ以上ドイツ人として生きるのは耐えられないと悲鳴を挙げるケースもあったという。

アデナウアーは 1963 年首相退任から 4 年後の 1967 年 4 月に逝去する。故郷のケルンで国葬が行われ、その棺は自宅近くの墓地に埋葬された。同氏の葬儀にはド・ゴール大統領、米国のリンドン・ジョンソン大統領、他、世界の首脳が出席したが、アデナウアーの墓の前で列席の首脳陣が弔意を表した時、ド・ゴールのみがアデナウアーの墓の前に進み腰を落としてアデナウアーの友情に感謝する写真がメディアで報道された。この写真を見て、仏独の修復が遂に実ったと感じた。今でも鮮明に記憶している感動的なイベントである。

ド・ゴールであるが、戦後、大統領（在位期間 1959～ 69 年）に選出されると 1962 年 9 月、始めて西ドイツの首都；ボンを国首として訪問、ボン市庁舎前でドイツの大衆に向けて ”和解“ の演説をした。その一部を引用する。ド・ゴールは、両手を民衆の方に向けて語りかけた。「ボン市、永遠であれ、ドイツ、永遠であれ、仏独友好、永遠であれ」（Long live Bonn! Long live Germany! Long live the Franco-German friendship!） この言葉を聞いて、今世紀二度もフランスと戦ったドイツ人は歓喜し大歓声を上げた。

ド・ゴール（左）とアデナウアーが求めたのは相互に結び合う欧州の姿であった

エリゼ条約 55 年を記念して、2018 年 1 月 22 日、アンジェラ・メルケル首相とエマヌエル・マクロン大統領は、防衛・外交政策や国境地域の住民生活での協力深化を目指す新条約：「新エリゼ条約（アーヘン条約）」に署名した。何度も戦火を交えた両国の和解を目指して締結された「１９６３年の独仏協力条約（エリゼ条約）」を補完するもので、両国関係を「新たな段階に引き上げる」とうたった。

新条約「アーヘン条約」の調印式で、署名を交わすドイツのメルケル首相（前列右）とフランスのマクロン大統領（同左）＝2018 年 1 月２２日、ドイツ西部アーヘン（ＡＰ＝共同）

****

「了解日本」（「日本を知る」（第１８回）　　俞彭年　（８６歳）

日本人の宗教観、神道（宗教）、天皇制

（１）

日本人の宗教観

古代日本人は万物に精霊が宿ると信じていた。彼らは、太陽、月、星、天、地、山、岩、木、動物、植物、宇宙のすべてに神がいると信じていた。彼らは神に畏敬の念を持ち、神を怒らせると不幸が訪れると考え、神の機嫌を損ねると自分に祟りをもたらすと思っていた。神を祭ることによって神を喜ばせ、自分を守ってもらい、自分に幸福が来ることを願った。

日本には「八百万の神」という古語があり、キリスト教の唯一の神、イスラム教の唯一のアラッカーとは異なり、古代日本人は多くの神がいると信じた。 彼らは、人間を含むあらゆるものが人々の信仰と祭事の対象になり得ると信じており、それが何であれ、それが効果的であれば、そこには魂があり、それを神として信仰した。現世や

人々の期待を反映した新たな神々が常時登場するため、神々の数は「800 万」以上あったらしい。

神々が祀られ拝まれる地域は神域と呼ばれ、世俗とは別であった。この場所が神々によって占められ、神聖で純粋な場所であり、汚れたものが侵入できない神前であることを示すために、藁で作られた縄・「注連縄（しめなわ)」を用いた。「注連縄」の飾られた古木は神が憑依した神木であり、「注連縄」の飾られた岩は神憑依した岩で、「注連縄」は神の占有を現す象徴であった。鳥居（神域の入り口にあるアーチ道、古代中国の華表に由来）は、神域と世俗の境界であり、大小、石製、木製、朱色塗りなど、さまざまである。

神々が宿る場所を社や神社と呼び、社にはもともと本堂はなく神垣（周囲に常緑樹が植えられ、真ん中に祭祀を行う神聖で清らかな場所）、と磐境（周囲に石を据え、岩を神座に充てる）だけがあった。後に仏教の影響を受けて本堂が建てられた。

日本全国に大小さまざまな神社があり、その数は 10 万社にも及ぶといわれ、その中でも最も格式の高い神社を神宮と呼び、伊勢神宮、熱田神宮、橿原神宮、香取神宮、明治神宮などがあり、続いて出雲大社、梅宮大社などの大社があり、残りは神社と呼ばれている。

神社はそれぞれの地で自社の祭礼をもち、その象徴は神体となる。 奈良の三輪山や富士山などは一山が、また岩石や瀑布、樹木などの自然物も神体となり、鏡、玉、剣、弓、矢、槍、祓い旗などの加工品の一部の場合も、さらに神々の像（絵画、彫刻、鋳物）の場合もある。神体は神々の付随物であり、皆それぞれ別で、誰も肉眼では見ることが出来ない。

仏教寺院の前に置かれた魔除けの神獣の影響で、神社の本堂前には狛犬と呼ばれる獅子のような一対の厄除けがあり、神々の使者であり邪気を祓う役割を果たしている。これは仏教の伝来と共に日本に伝わったインドの獅子像の影響である。

しかし、稲荷神社の前には狛犬の代わりに 2 匹の狐がいて、古代日本人は狐が田神の使者であると信じていた。神々を喜ばせるために瓜や果物、酒、食べ物などを供えるほか、歌や踊りも奉納され、このような歌や踊りは神楽と呼ばれ、地域によって内容が異なり、地元の民俗と継承を反映している。夏には先祖を慰藉する祭りがあり、最も有名なのは京都の八坂神社の祇園祭であり、立派な神輿や山車が祖霊を乗せて街を巡る。

神職の名称は変化が多く、現在は神社本庁分類によると神社の長は宮司、その下は祢宜、副職は権宮司、権祢宜、民間通俗的な呼称は男は神主、女は巫女と呼ばれ、これまでは世襲だったが、現在は神社本庁所属の神職任用資格を得るだけで就任できる。

神社参拝には多くの決まりがある。神社に出入りするときと鳥居をくぐるときは、上体を少し前傾させて敬意を表し、鳥居から神社まで参拝するときは、真ん中ではなく端を歩く必要がある。参拝する前には、必ず「手水舎」にて、柄杓で水をすくって左手を洗い、次に右手を洗い、口をすすぎ、体から汚れたものが取り除かれたことを示す。

神に祈る前に、お供え物の代わりとしてお賽銭を献上し、その後に神殿の前に垂れ下がっている縄を揺らし、鈴がなることで、神に祈願に来たことを知らせることになる。その後祈り始めるのに二拝二拍一拝をする。拍手は和合を表し、祈祷の後に神殿を出るときは、神殿に向かってお辞儀をする。おみくじは神に自分の吉凶禍福を占ってもらうことであり、その場で何度もおみくじを引いてはいけない。この行為は神々への不敬であり、神々のお告げを疑うことである。

自然崇拝に加えて、古代日本の信仰には祖先崇拝も含まれていた。つまり、祖先の魂には超自然的な能力があり、家族を守ると考えて、人格的神として追想された。

祖先崇拝は氏族団体社会で発生し、氏族の祖先を氏神崇拝としている。氏族団体の崩壊後、氏族神への信仰は次第に薄れ、代わりに鎮守神（地域を守る神）や産土神（生まれ故郷を守る神）への信仰になっていった。

日本人には、子どもが生後満 1 か月のときに神社に参拝し、神々に出産を報告して地域社会への参加を表明し、神々の承認と祝福を祈る習慣がある。これをお宮参り（守護神参拝）という。男の子は 3 歳と 5 歳、女の子は 3 歳と 7 歳のときに、その年の 11 月 15 日に神社に行き、守護神（出身地と地元の神々）に敬意を払い、成長を神々に報告し、神のご加護を祈願する。

神社は 2 種類あり、一つは、産土神（出生地守護神）を祀る神社で、地元の人が五穀豊穣を祈願し、豊作に感謝する神社である。日本全国の多くの神社が属しているのがこの種類。

もう一つは、天満宮、八幡神社、稲荷神社などの神を迎える分霊供養をする神社である。これらの神社は総社であり、京都伏見稲荷神社、宇佐八幡神社、北野神社、北野天満宮と太宰府天満宮などが総社である。

538 年、大乗仏教が中国から朝鮮の百済を経て日本に伝来すると、支配層の間で仏と神の関係をどう扱うかという問題が起きた。闘争の末、仏教は国家を守る規範と思想として支配階級に受け入れられ、政治と密接に統合され、国家の支援と援助を受けて大きく発展した。支配階級は、神が仏法を守り、神も仏法で悟りを開くことができると考え、「神仏習合（神仏調和融合）」の法にならい東大寺の大仏を建立する際に、八幡宮に手を向けて東大寺を鎮守し、宇佐八幡神を八幡大菩薩と呼び、その後各地に寺院を鎮守する神社が建立された。

彼らは、神仏を「本地垂跡説（仏が神として現れる）」と「逆本地垂跡説（神が仏として現れる）」と混同して一つにした。当初、仏教は支配階級のみに人気があったが、その後、戦争、自然災害、病気が蔓延する激動の時代に、一般の人々は徐々に仏教を求める考えを発展さていった. 独立した仏教団体も人々の間で説教を始め、それで一般の人々の間で仏教が流行するようになった。

1549 年、西洋の宣教師が日本の九州にやって来る。宣教師たちは、カトリックを広めるだけでなく、西側諸国との貿易も盛んに展開した。日本はこの貿易を「南蛮貿易」と呼んでおり、この貿易に従事した地元の大名達は、宣教師を保護し、カトリック教会の建設を許可したことで大きな利益を得たため、庶民の間でより多くのカトリックを信仰する人が多くなった。

天正 10 年（1587 年）、天下統一を果たした豊臣秀吉は、神の国と仏教国である日本にカトリックを広めることは適切でないと宣教師の追放令を発し、宣教師が人々にカトリックを改宗させるのは仏法破壊行為であるとした。

1612 年、江戸幕府はカトリック禁止命令を発し、宣教師を日本から追放し、カトリック教徒にカトリック信仰を放棄するよう強制し、放棄しなかった人々を厳しく罰した。19 世紀半ば、西欧列強の圧力の下で、明治維新政府は 1871 年に強制改宗の慣行を停止し、1873 年に禁制を廃止し、人々は信教の自由を手に入れた。

カトリック、キリスト教徒、イスラム教徒（全員が一神教を信仰している）を除いて、現代の日本人は宗教的概念に厳格ではなく、神々を崇拝するために神社に行き、仏を崇拝するために寺院に行き、神と菩薩の加護を求め、神と菩薩が自分の願いを実現するのを助けてくれることを祈っている。

若者は「神前婚」と呼ばれる神社での結婚式が好きで、教会での結婚式も好きである。葬式の大半は仏教の儀式に従って執り行われるが、神社では死体や遺骨は穢れたものであるため葬式を取り扱わない。

日本人は非常に賑やかな大晦日に神社仏閣に参拝する風習があり、神社仏閣でお守りを購入して身につけたり、家の壁や柱に貼り、魔除けになると信じている。7 月13日から 16 日または 8 月 13 日から 16 日はお盆で、 豊富な供物を並べ 13 日夜には、先祖の霊が中庭で乾麻の棒を燃やして迎えられ、仏壇の前で提灯を灯し、16 日に同じく火を焚いて先祖の霊を送り返す。お彼岸（3 月と 9 月）には、家族そろってお墓参りをする。

****

アンテナ・コーナー（最近の新聞・ネット・本などからの「気になる話」）

****

● 新聞　１月６日（土）、朝日新聞・朝刊より

寺島実郎・（財）日本総合研究所会長・多摩大学学長へのインタビュー、「２２世紀への針路は」

２０２４年は歴史の中でどう位置づけられるでしょうか

この国が置かれている状況を歴史の時間の中で考えて見ましょう。明治維新から１９４５年の終戦までは７７年でした。これは終戦から現在までとほぼ同じ長さです。そして７７年後は２２世紀最初の年です。これからの７７年を『未来圏』の２１世紀と捉えた国家構想が今求められていると思います。

経済で考えると、日本の国内総生産（ＧＤＰ）が世界に占める比率は、明治が始まった頃と敗戦から５年後が、ともに３％程度でした。敗戦を『物量で負けた』と認識し、鉄鋼、電機、自動車などの輸出産業を育てた日本は、９４年には世界のＧＤＰの１８％を占めました。しかしそれをピークに低迷し、３０年後の今年は、３％台にまで落ち込むとみられています。

明治初頭、敗戦後と同じレベルになりつつあるのですね

そうです。９４年には日本を除くアジアのＧＤＰの合計は世界のわずか５％でしたが、いまは２５％を超え、日本の６倍以上です。日本は一人当たりのＧＤＰでもアジアで５位、世界では３４位です。この現実を、どれだけの人が正視しているでしょうか

松下幸之助が唱えた『ＰＨＰ（繁栄を通じて平和と幸福を』に象徴されるように、何よりも豊かさを追求したのが戦後日本でした。世界２位の経済大国という自尊心が、２０１０年にＧＤＰで中国に抜かれたことで砕かれ、このことが日本人の精神に及ぼした影響は計り知れません。

政権奪還のため安倍晋三氏が掲げた『日本を　取り戻す』というキャッチフレーズは複雑な意味を持つものでしたが、中国に抜かれたショックが通奏低温として響いているに見えました。昨年、日本のＧＤＰはさらにドイツに抜かれ、２６年にはインドに抜かれると予測されています。今こそ日本のポテンシャルが試される時ですが、この国の現状を直視して、危ういものを感じています。

危うさ、ですか

現実に正対して技術を磨き、生産性を高め、産業基盤を強化するのではなく、あるいは経済を超えた価値を創造しようというのでもなく、やすきに流れ、見た目をよくし

たいという心理に傾きました。為替を円安に振れさせて輸出のハードルを下げ、金融を異次元で緩和して経済を水ぶくれさせる『アベノミクス』という調整インフレ政策に対して、経済界も、国民も暗黙の支持を与えてしまいました。本質的な問題から目を背けているように感じます。

日本経済が抱えている本質的な問題とは何でしょうか

個別の要素技術、部材・部品、の優秀性に自己満足し、力を合わせ要素を統合してプロジェクトを完結する総合エンジニアリングが欠如していることです。

技術を誇っていたはずなのに国産中型ジェット旅客機開発から撤退し、新型コロナのワクチンは3年以上作れませんでした。日本の産業は『安ければ外国から買った方が効率的だ』という国際分業論に立ち、外貨を稼ぐ輸出産業で豊かさを求めてきました。その結果が現下の超円安であり、輸入インフレによる物価高と財政規律の喪失です。

これからは、国民の安全・安定のために耐久力を重視する産業構造に作り変える必要があります。『食と農』『医療・防災』、そして支える人材を育てる『教育・文化』が重要産業になると思います。

未知の局面で日本が進むべき針路とは

日本は20世紀初頭から今日までの約120年のうち、90年以上を『日英同盟』と『日米同盟』というアングロサクソンとの二国間同盟で生きてきた国です。間の30年は迷走し、戦争と破滅に突き進みました。米国自身が『国際主義』から『自国利害中心主義』へと変質する中で、日本は同盟外交を軸としながらも、多次元外交へと進み出さざるを得ません。

冷戦後、日本はただ米国流のグロバーバリズムに合わせることに埋没し、自前の国家構想を見失ってきました。グローバルな全員参加の秩序の中で、耐久力の強い産業基盤を築き、非核平和と民主主義に徹した理念性の高い国家として存在感を高めるべきです。

****

●新聞　1月11日（木）日経新聞・朝刊　「昭和99年、日本反転」より

亀田製菓CEOがまく「夢の種」外国人も輝く国に

「米国にはアメリカンドリームがある。日本にそこまでの夢を描く魅力があるだろうか」

インド来日40年

2023年12月、記者は「柿の種」で知られる亀田製菓本社（新潟市）で厳しい言葉を突き付けられた。言葉の主はインド出身の会長兼最高経営責任者（CEO）、ジュネジャ・レカ・ラジュさん（71）。40年前、大學で微生物学を研究するため家族と来日、太陽化学やロート製薬を経て、22年に現職に就いた。「安心、安全で清潔。何を食べてもおいしい」。取材中、日本を何度も褒めるジュネジャさん。だが働く場所としての評価を尋ねると表情が曇った。夢を描きにくいのは「日本の人事制度などに外国人に適さないルールが多いから」と語った。

ジュネジャさんの40年は、日本が外国人受け入れを進めた時期と重なる。外国人政策の転換点は1989年の出入国管理法改正。「定住者」など10種類の在留資格を新設し、南米出身の日系人の定住化が進んだ。93年に技能実習制度、2019年に特定技能制度が新設された。

ジュネジャさんが日本を選んだきっかけは、「日本が世界一になる」という先輩の

言葉だ。当時、世界の時価総額トップ１０には多くの日本企業が名を連ねていた。「日本人は戦争で全てをなくし、一生懸命に働いて、世界一になる夢物語の中にいた」と振り返る。私生活では多くの困難に直面した。素材そのものを味わう日本の食文化には戸惑った。たこの刺身は「こんなものを食べるのか」と驚いたが、大学の恩師に「とにかく口に入れて、おいしさを感じなさい」と言われ食感の魅力に目覚めた。

家族は言葉や教育の壁にぶつかった。２人の子供は地元の公立学校に通わせたが、途中からカナダに留学させた。「顔はインド人、でも日本語しか話せないと将来の選択肢が限られる」。悩んだ末の選択だった。「米国に行っていたら子供の教育でこんな苦労はしなかった」。ジュネジャさんの妻はよくそういった。今、長男は米国、長女は日本で働く。

日本には３２０万人を超す在留外国人が暮らす。４０年前の４倍近くに増え、７０年ごろには人口の１割を超える試算もある。だが政府は「移民政策はとらない」姿勢を崩さない。「米国には黒人やプエルトリコ人、メキシコ人がいるから日本より知識水準が低い」。１９８６年、当時の中曽根康弘首相の発言は国内外で批判を浴びた。

外国人を労働力の穴埋めとみなし、社会を成長させる「仲間」と認めない背景にこうした認識が残っているとしたら、日本は成長のチャンスを自ら失っている。

医学重視に警鐘

５６年に人口１億人割れが見込まれる日本で、外国人材は社会の大切な支え手だ。ITや介護分野に外国人材を紹介する「ZenKen」の木村祐一本部長は「日本企業は日本語力など外国人に難しい部分ほど採用で重視する。このままでは「選ばれない国」に成り下がる」と警鐘を鳴らす。

亀田製菓は世界展開へと大きく舵を切った。ジュネジャさんの入社後、外国籍の社員は約３倍に増加。小麦粉を使わないグルテンフリー市場が拡大する中、食感が特徴的な米菓は海外でも喜ばれるという「気づき」が推進力になった。

「日本は自分たちのポテンシャルを一番分かっていない」「日本にはものづくりの技術がある。必要なのはイノベーション、変化です」

そう熱弁し、片手いっぱいの「柿の種」をほおばるジュネジャさんは、コメの魅力が世界８０億人に伝わると誰よりも信じている。

ムラ社会の凝り固まった価値観をほぐし、掛け声だけの外国人共生から踏み出すことが、「成長の種」を見つけ出す突破口になる。

****

●ネット　（１/５）ヤフー　デイリー新潮編集部　より

最大震度 7 を観測した能登半島地震は発生から 5 日目を迎えたが、現在も懸命な救助活動が続けられている。電力供給や通信サービスといったインフラ面の制限に加え、必要な物資も滞るなかにあって、いち早く支援物資を届けたのが山崎製パンだった。

「これまでも同社は阪神・淡路大震災や新潟県中越地震、熊本地震などの大きな災害時に素早い対応で支援物資を届けてきたことで知られます。

2016 年 10 月 21 日に起きた鳥取県中部地震の際には、発生当日のうちに同社の岡山工場から菓子パンなどが続々と届けられ、翌未明までに約 1500 個が到着。11 年の東日本大震災時には発生翌日に約 60 万個のパンが現地に届けられただけでなく、避難所が閉鎖された同年 11 月までに約 1500 万個のパンや約 800 万個のおにぎりなどが供給されました」（全国紙社会部記者）　それを可能にした理由の一

つが、同社の“自前主義”という。「独自配送」へのこだわり。
　創業時から山崎製パンは〈自分で作って、自分で運び、自分で売る〉というスタイルを貫き、製造部門だけでなく、商品を運ぶ物流部門や販売部門をグループ内に確立。白地に黒の『ヤマザキ』の文字が躍るトラックは自社で物流網を築いていることの証です。自分たちで“川上から川下まで”担うやり方は、昨今の“選択と集中”型の経営スタイルがもてはやされる時流からは逆行しますが、これがイザという時の“瞬発力”に繋がっていることは否定できません」（食品業界ジャーナリスト）
　この自社一貫体制の構築には、3 代目となる現社長・飯島延浩氏（82）の哲学が影響しているという。
　石炭産業が衰退したのは、船や鉄道など時代とともに移り変わった輸送手段（物流）に左右された面が大きいと考えた飯島氏は、大手流通企業などとの共同配送を拒み、独自配送にこだわり続けた。山崎製パンが業界のなかでも“異彩”を放つのは、飯島社長の思想や人物像と無縁でないと見られています」（同）

　飯島氏は売上総額 1 兆円超の企業グループを率いる経営者としての顔だけでなく、敬虔なクリスチャンとしての一面も併せ持つ。
　飯島氏がプロテスタント教会で洗礼を受けたのは 1973 年。その直後、当時の主力工場だった武蔵野工場が火事に遭い、全焼する不運に見舞われる。しかし周辺の工場の支援や協力によって、すぐに通常の供給体制を回復したといいます。この困難を経て、飯島氏は会社としての使命を問ううちに、被災地への緊急支援は『食品企業としての責務』と公言するようになったと伝えられます（同）
　山崎製パンに今回の支援について訊ねると、「火や水もない緊急時に、そのまま食べられるパンなどをできる限り早く、現地へと届けるのは当社の使命と考えています。今回も地震発生後、農林水産省から日本パン工業会に支援依頼があり、それに弊社が応えた形です。（迅速な対応が可能だったのは）自社で配送を持っていることや過去の経験、社内体制などが生きた結果と考えています」（同社広報）
　届けられたパンを頬張り、被災した人たちに束の間でも笑みが戻れば――と願わずにいられない。

（天地）文中に出る山崎パンの飯島延浩社長、大学のバスケット部の後輩で４年時に、１年生として入部してきました。直ぐにレギュラーにはなれませんでしたが、粘り強いプレーが特徴で、４年間頑張り、部を卒業していきました。性格は、真面目で、考え方はオーソドックス、会社経営にもそれが表れているのでしょう。
会社設立は昭和２３年６月、戦後、コッペパンしか食べていない時に近くに山崎パンの販売店ができ、アンパン、クリームパン、チョコレートパンなどの菓子パンを初めて口にしたときの驚きは、今でもハッキリと覚えています。「パンを買うなら山崎パン」が、頭脳にインップットされています）

****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）

住所：〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１
ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１